



ハートで
ぬくもりと安心を
お届けします

さくらだより

第 39 号

2016年10月15日



小物づくり
サークルより



ワークパートナー
YUI ストラップ

特集

地方創生を みんなの手で

- サービス
放課後等デイサービス
- FREE フリー
納涼大会から
- テーマ
未来のボランティア
- 繋がる・集う
朝市
- リレーコラム ● 編集後記



特集 地方創生をみんなの手で

「東京で働きたい」

「東京の大学に行きたい」

誰もが一度はそんな憧れを抱いたことがあるのではないのでしょうか。

東京都の人口は1361万人。日本の政治経済の中心で、世界でも有数の巨大都市です。2020年の夏季オリンピック・パラリンピック開催も控えています。これからはますます東京が、日本そして世界の中で果たす役割の大きさは増すばかりにも思えます。

一方でこんな報道を目にしたことを覚えている方も多いのではないのでしょうか。

「2040年には我が国の896の自治体が消滅する危機にある」

これは、2014年5月、日本創成会議が我が国の総人口の将来推計から導き出した推計結果です。少子化の影響で、日本の総人口は1億2707万人(2014年)から、2050年には1億人を割り込み、2100年には5000万人を下回るとの推計(国立社会保障・人口問題研究所)をもとにシミュレーションしており、地方には人口の減少から存続できない自治体が現れるとの警鐘が鳴らされたのです。

また、こんな報道もありました。

「高齢者の地方移住を促進 生涯活躍のまち構想」

2015年12月「生涯活躍のまち構想」

参画すべく新たな活動を始めました。その模様を広報委員杉山が取材しました。

「地域交流委員会に参加して」

醍醐の家ほっこりでは、地域との交流を深めることを目的とし、地域交流委員会というチームを立ち上げました。ほっこりの職員だけでなく、醍醐北部地域包括支援センターの職員も会議に加わっています。

地域交流の取り組みのひとつとして、広報活動に力を入れています。「ほっこりんぐ」という、醍醐の家ほっこり独自の広報誌発行を企画し、委員は記事作りに奮闘しています。



醍醐の家ほっこり 地域交流委員会の様子

を検討している政府の有識者会議は最終報告書をまとめ、地方創生担当大臣に提出しました。

「生涯活躍のまち」とは、高齢者が健康なうちから地方に移住して作る新しいコミュニティ(共同社会)のことです。構想によると、このまちに移住した高齢者は就労、社会活動、生涯学習など生きがいをもって生活し、年齢を重ねて介護が必要になった場合もケアを受けながらまちの中で暮らし続けることができるかとされています。

皆さんは、これらの報道から地方の未来にどんなイメージを持たれるのでしょうか？

ある人は「若者が躍動し、首都として輝き続ける東京。高齢者がゆつたりと暮らせる地方」という印象を持つかもしれません。また別の人は「ますます豊かになる東京。住む人もまばらになり活力がなくなる地方」という見方をするかもしれません。まさにどう感じるかは千差万別でしょう。

しかし、明らかなのは、このままでは東京など大都市には「人」や「しごと」が風船が膨らむように集まり、逆に地方は空気が抜けるようにしぼんでしまうということではないのでしょうか。

政府は2014年9月、「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、地方に活力を取り戻すための計画を立て、この問題に本腰を入れて取り組もうとしています。

高齢者やその家族を中心とする地域の方々に対し、「地域のサービス、介護の知識を少しでも知ってもらいたい」「醍醐の歴史や、地域で頑張っておられる民生委員さんを紹介したい」という思いをもとに、地域の人々を支える情報を今まで以上に広め、地域交流に向けた活動に取り組んでいます。

先に述べた通り、地方創生の考え方には『ひと』と『しごと』の分散に目が向けられがちではなかったでしょうか。しかし、このような人口移動によって、地方の財政問題を解決し、社会資源を整え、地方を活性化させることには、限界があるとも思われま

す。本当に重要なことは、誰もが安心して住み続けられる地域が現実にあることだと思います。地域活性化のためには、地域のつながりを強めることがなにより重要で、その地域を知っている人たちがどれだけそこで暮らし、活動しているかが大きなポイントであると思います。そのため私たち京都老人福祉協会ができることは、福祉サービスを必要としている人々はもちろん、私たちの持っている情報を地域の誰でも知ることができ、環境をつくることもそのひとつではないかと考えています。

私たちは微力ながら多様な取り組みを通じて「地域づくり」に参画し続けることで、地方創生の一翼を担えることを願っています。



政府の役割もさることながら、それ以前から地方では「活性化」「地域作り」をめざして多くの人がさまざまな取り組みを行ってきました。その働き手は自治体だけではなくありません。地元企業や団体そしてそこに住む人一人ひとりが手を取り合って、地方の活性化、活力ある地域作りをめざして活動してきました。そして、多くの取り組みが実を結んできました。

京都老人福祉協会・醍醐の家ほっこりでも、誰もが暮らしやすい「地域づくり」に



放課後等デイサービス

「遊びのなかで学ぼう」

2012年4月1日に児童福祉法に位置づけられた新たな支援であり、6歳から18歳の就学している障がいのある児童を対象として、放課後や夏休み等長期休暇中に生活能力向上のために必要な訓練、社会との交流促進などの支援の充実・居場所作りのためのサービスがはじまりました。

サービス内容としては、自立した日常生活を営むために必要な訓練や、創作的活動、作業活動、地域交流の機会の提供、余暇の提供を複数組み合わせることで支援を行うことや、保護者への支援が求められています。

当法人では藤森センター内「にじっこひろば」が、2014年よりサービスを提供しています。

現在、にじっこひろばでは小学生を対象に、平日13時から17時、土曜日・長期休暇は8時30分から17時にサービスを提供しており、同じ藤森センター内にある、うづらこども園や高齢デイサービスとの交流があります。

新規事業として伏見センター内に放課後デイサービス「第二にじっこひろば」が開設予定です。これまで実施していな

かった18歳までのサービス提供や送迎時間の拡大を行っていくことで、中学へ進学するとともに他の施設を探さなくてはならない不安や、送迎拡大により家族の負担が軽減されます。また当法人が実施している療育センター「なないろ」や就労支援A型のワークパートナーYUIとの連携なども図り、それぞれの年齢に求められる個別の取り組みをすることで、家族や利用者にとって慣れた場所で安心して過ごすことができるのではないのでしょうか。

当法人の藤森のにじっこひろば、今年度開設予定の第二にじっこひろばの特色として、一人ひとりの個別の目標やプログラムを基本としながらも、特性やニーズ、目標、年齢の近い者同士が集まりふれあうことで相互作用が生まれ、より成長が促されることと考えます。目標に合わせたグループ分けなども行い、小集団活動を通してそれぞれの長所を伸ばしながら、お互いに刺激し合うことで相乗効果も期待されます。そういった目標に向けた取り組みができる活動プログラムを検討していきたいと思っています。



納涼大会から見える地域のつながり

夏の風物詩となった京都都老人ホームの納涼大会で、参加された地域の皆様、一緒にボランティアの皆様から話を聞き、納涼大会から見える地域のつながりをご紹介します。



ボランティアさんにインタビュー



Q 参加回数は?
A 納涼大会は2回目。毎週土曜日にも京都老人ホームに来ている。

Q 参加した理由は?
A 大学でボランティアサークルに参加して、自分にあっていると思ったから。

Q 楽しみに感じることは?
A イベントを運営する事にやりがいを感じる。



地域の人にインタビュー



Q 参加した理由は?
A 平均3回。毎年こられる方も。

Q 参加した理由は?
A チラシや回覧板を見て。食べ物が美味しい。晩御飯をかねて。歩いてこれる。子供が楽しめる。

Q 楽しみにしている事は?
A 利用者さんが幸せそうにしている姿を見て癒される。花火が楽しみ。毎年食べ物が変わるのが楽しみ。

Q 他にこんな催し物があれば?
A 今のままで充分。

内定者さんにインタビュー



Q 参加した感想は?
A この地域の人と子供、利用者さんに関わるのが楽しい。

ポップコーンを作るのが楽しい。地域の人を身近に感じる事が出来る。触れ合えるのがとてもすばらしい。みんな楽しそう。自分も楽しかった。地域に密着した法人だと思った。こういう行事は地域と利用者が交流できる大切な機会だと思った。

Q 納涼大会の印象は?
A アットホーム。利用者と職員がわきあいあいであったかい印象。

納涼大会は、利用者さんに楽しんで頂くだけでなく、地域の人にも来ていただくことで、利用者さん、地域の方々、職員の大切な交流の時間にもなっています。また京都老人ホームの納涼大会を盛り上げるために、職員だけでなく、ボランティアの人や、内定した方々が開催に協力してくださっています。そのおかげもあり、数多くのイベントをする事が出来ています。京都老人ホームの納涼大会は沢山の山の人たちに支えられて行っていると感じます。

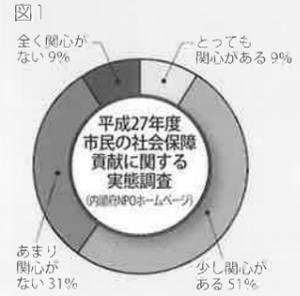


未来のボランティア

1995年1月17日、阪神淡路大震災発生後、「何かしてあげたい」「何かしなくては」という思いから、100万人以上のボランティアが集まりました。その中にはボランティア活動をしたことのない人も多く、1995年は「ボランティア元年」と呼ばれています。

平成27年度内閣府の調査では、ボランティア活動に対する関心の有無で、図1のような結果が出ており、ボランティア活動に関心を持っている人が過半数となっています。

ボランティアの種類が多様化し、ボランティア人口も増えてきている現在、自分に合ったボランティアを見つけるためには情報が必要になります。



地域の中でのボランティア

京都老人福祉協会の中には介護予防推進センターという部署があります。地域の高齢者を対象に、主に地域での活動、居場所づくりをコーディネートする役割を担っています。

高齢者が役割を持って活動し続けることは地域にとって、人と人とのつながりにおいて重要なことであり、又介護予防効果が高いとも言われています。

しかしながら、将来的なことを見通すときには、活動拠点の把握が難しい事や、自分の求めるボランティアの情報が少ない事が問題点として挙げられます。

ボランティア意識が高まってきている昨今、様々な媒体を利用して求める側と供給する側とがスムーズに連携しあえる体制づくりが求められています。

将来的には現地に赴かずとも、仕事や学校に行きながらでもボランティアに参加できる…マッチングサービス等の立ち上げも試みられています。誰かの為に役に立つならば…という善意を大いに活用できるよう、当法人では今後も事業所、地域を中心に取り組んでいきたいと思っております。

未来にはこんなマッチングシステムがあるかも？

ボランティアGO

①アプリをダウンロードします

②ボランティアが必要な人の近くに行くと反応

③内容をきいてボランティアをする

④お手伝い完了!

ボランティアワープ装置

①役所から装置が送られてくる

②困った時にスイッチをおして、内容を話す

③ボランティアしたい人が出てくる

④お手伝い完了!

リーレー relay column コラム

もっと、ほんまに、平和な町づくりをめざして

稲荷の家ほっこり総括主任 下村敦子



いつも、「ほくらだより」が事業所に届くと楽しみに読ませていただいています。「ほくらだより」には法人のことはもちろん、法人内サービス事業所の紹介や社会情勢…そして職員さんの思いなど、その時々に合わせて内容が多岐にわたり、広報委員さんの努力と熱い思いが伝わってきます。リーレーコラムも、毎回法人職員さんが色々思うことを伝えられており、「そう思うー」「そう思うー」と記事を読んで自分も勝手に納得して見たり…、また記事の内容に感心し、またもや勝手に自分に置き換え、身の引き締まる思いをしたり…。その「ほくらだより」に自分の順番がくるなんて…。「楽しみながら書いて下さい」と笑顔で言われましたが、ますます緊張（今でもです）です。しかし、時間に追われあつという間に過ぎていく毎日、少し立ち止まり考える時間を頂いたのかなと思っています。

私は、京都老人福祉協会にお世話になり、相談支援の業務を主にいくつかの事業所も経験させて頂きました。現在は稲荷の家ほっこりでお世話になっております。ご存じの通り、稲荷の家ほっこりは1階が小規模多機能事業所、2階が京都市より委託を受けて地域子育て支援拠点事業…つどいの広場を行っています。ですので、普段から一つの事業所で子どもと高齢者と職員が「おはよう」「こんにちは」と挨拶を交わし、挨拶を交わすことで、初対面同士の方々でも、その後お互いニコッと笑顔になる。そんな微笑ましい光景、当たり前のように、挨拶が、見ているこちらまでも微笑ませてくれる、そんなやり取りがある事業所です。その事業所で働くことができ嬉しく思っています。

京都老人福祉協会も、もっと、ずっと、この町での合言葉と共に、ここ伏見の地を大切に、高齢者事業を始め、子ども事業や障がい関係の事業など様々な事業が展開されています。それぞれの事業所が地域に根差

■ 編集後記 ■

広報委員になって10ヵ月がたちました。読んで下さる皆様にとって、わかりやすくおもしろい記事が書けるよう日々取り組んでいます。

自分の知らない分野について記事を書くこともあり、様々な分野のたくさんの方に協力していただきながら、1つの記事を作り上げていきます。記事づくりは広報委員にならなければ関わることもなかったような、多くのことを学べる機会になっています。

文章を書くことは苦手ですが、どうしたら読みやすいか、興味を持ってもらえるかを考えながら、今後もより良い記事づくりに励んでいきたいと思っております。

広報委員 吉田 鈴

した事業所となるために、また地域に必要とされる事業所となるために、地域住民の思いや利用者の思いを知って、そして、その思いを大事にしていかなくてはならないと考えます。そういう事から考えても、私たちが事業を行う上で、「人」と「人」の関わりなくして前には進めないと思えます。

先ほど、稲荷の家ほっこりでの挨拶の様子をお伝えしましたが、挨拶は日常生活には欠かせない、人と人が気持ちよく生活するための言葉であると言われると思います。まずはお互いが気持ちよく挨拶を行うことで、その後も自然と言葉のやり取りができ、何回か繰り返されたのち、お互いのがかりあえ信頼関係が生まれるものだと思います。利用者さんの思いに寄り添い支援させて頂けるのも、また、地域の人たちに支えて頂けるのも、そして仕事の仲間と色々な意見が言い合えるのも、わざわざ丁寧な挨拶はしないけれど根底に信頼関係があるからだと思います。今まで出会った人たちに感謝しつつ、これから出会うであろう人たちとも笑顔で挨拶を行っていきたくと思っています。

繋がる
集う



京老「朝市祭」始まりました!

10月2日(日曜日)、地域の皆様とともに第1回秋の「朝市祭」を開催いたしました。

地域の皆様や深草農園様、法人内の事業所などさまざまな皆さんのご協力により新鮮な野菜、手作りのお菓子、アクセサリー、日用品など多くの出店を頂き賑やかに開催の準備をまいりました。

地域の皆さん、特に大亀谷の皆さんに来園頂きたくお声かけをしたところ、皆様のご理解を得、町内の掲示板に案内を上げていた

機会となりました。

社会福祉法人京都老人福祉協会は1957年6月、養老施設「京都老人ホーム」を開設し、来年で60周年をむかえます。「地域とともに生きる」を理念に掲げ、京都伏見で事業所・サービスを拡充しながら地域の方の暮らしとあんしんを支えてまいりました。

介護保険、子育てなどさまざまな福祉制度がありますが、制度と制度のすき間から漏れ落ちる現実が必ず出てきます。この「すき間を埋めること」社会の「ニーズ」に応えるという、本来の社会福祉法人としての使命を、私たちはもう一度取り戻さなければならぬと考えています。私たちが福祉の現場から、行政や社会に提案をしていくべきだと考えています。

しかし私たちの存在だけでは、地域が抱える問題は解決しません。大切なのは、地域のパワーや資源を生かすこと。その地域自身が、そこに暮らす人々をサポートできるよう、私たちは施設から飛び出し、地域の方々と手を携えていきたいと思っています。

その先駆けとして、今回京都老人ホームにて朝市を開催する運びとなりました。地域の



く等さまざまにご協力頂き、今回の朝市のテーマ、地域の皆さんと「繋がる・集う」そして京都老人福祉協会をご理解いただく、関心を持って頂けるそんな

皆様、関係者の皆様と同じ時間を過ごすことでより一層、地域の活性化・元気に繋げていきたいと思っています。

京都老人ホームは「深草トレイル」大岩山展望所コースの沿道となっております。少し早起きをしてウォーキング、そしてぜひ、第2回京老朝市に足を運んで頂きたいと願っています。早起きは三文の得といいますが、掘り出し物、お得なものを用意いたしております。第2回京老朝市にご期待ください!

繋がる・集う
秋の朝市祭
2016年10月2日(日)
どなた様でも参加できます

繋がる・集う
大亀谷の朝市祭!!
2016.12/4(日)
8:00~11:00(小雨決行)
会場: 京都老人ホーム 第三駐車場内

主催: 社会福祉法人 京都老人福祉協会・朝市実行委員会
共催: 朝市実行委員会 電話: 075-641-6675